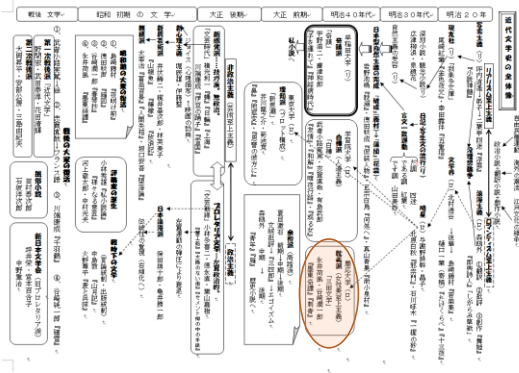


日本文学(近代文学)史講義

美におぼれるものは…何をつかむ？



自然主義なんかには負けない！

自然主義の中心(早稲田大学)

「奇蹟」派

人間の醜態さ

学習院大学
「白権」派
人道主義
人間は、もつと
すばらしいもんだ

人間の門さ

慶應大学
耽美派
女性美至上主義
美しいもんを
描いていこうぜ！

現実の重視

東京大学
理知派
理知主義
物語は作家が
創り出していくんだ

next

世界美術史にみる「耽美派」

耽美主義 (たんびしゆぎ)

道徳功利性を廃して美の享受・形成に最高の価値を置く
西欧の芸術思潮。これを是とする風潮は19世紀後半、フ
ランス・イギリスを中心に起こり、生活を芸術化して官能の
享楽を求めた。1860年頃に始まり、**作品の価値はそれに
込められた思想やメッセージではなく、形骸と色彩の美に
あるとする。**

~~作者の主張 → 芸術作品 → 受容者~~

芸術作品 = 美 → 受容者

耽美派の発展？

アルジャーノン・スウィンバーン

「絵の意味は美そのものだ。存在することだけが、この絵
の存在理由(raison d'etre)なのだ」

社会が認める美 → 作品

~~作品=美~~

この美は、社会の価値とは無関係



神秘主義

悪魔主義

伝統的な宗教の信仰を疎んじ(欧米では何らかの伝統的
な宗教を信仰することが当然とされる)、自己中心的な世
界観を構築し、エゴイスティックであることを好む。

耽美派は社会と対立する

**常識的な美しさが芸術を創るのではなく、
芸術があたらしい常識的な美しさを生み出すのだ！**

既存の社会との対立を生む

(例) フランツ・マルク「鳥」

ジョージ・グロス「カフェ」

こういったものをナチスは、「廃退芸術」として排除



マックス・ノルダウ

「近代芸術は、脳の病気」

荷風の変化！

永井 荷風、1879年(明治12年)12月3日 - 1959年(昭和34年)4月30日)は、日本の小説家である。耽美的な作風で明治から昭和にかけて活躍した。本名は永井壯吉。号は**断腸亭主人**、金阜山人。

前期荷風 自然主義(ゾライズムの継承者)
↓
後期荷風 反自然主義=耽美派のリーダー



国民国家として完成する日本への呪詛

『**地獄の花**』は、明治35年、荷風(1879-1959)がゾライズムの影響を受けた時期の作品で、これによって新進作家として認められた。理想の人生の実現のためには人間の動物的側面を明らかにせねばならぬという立場から、教育家の醜悪な裏面生活や、富豪の妻の不倫などを暴露して、敢然と社会悪への挑戦を試みた青年荷風の激しい意気込みが感じられる。

『**あめりか物語**』『**フランス物語**』 = 発禁
当局がこの作品を嫌った最大の理由
あまりにも率直に表明された、**祖国への嫌悪**

「どうしても日本に帰たくない、巴里に留まりたい」と駄々っ子のようにふさぎこみ、「自分は日本の国家が、芸術を虐待し、恋愛を罪悪視することを見聞しても、最早や要なき憤怒を感じまい、なぜなら「世界にはフランスという国がある」と開き直る。実に毒に満ちた呪詛である。

永井荷風之美

結婚・女性
1912年 斎藤ヨネと結婚。兼ねて馴染みの新橋巴屋の芸者八重次に入れ込み、家庭を顧みず。
1913年 父の死後まもなく、ヨネと離婚。
1914年 八重次と結婚、弟威三郎と絶縁。
※八重次は本名・内田八重(1880-1966)。後の日舞藤藤流初代家元藤藤静枝。
1915年 八重次と離婚。
女性観
「子供が成長して後其身を過ち、盗賊となれば世に害を貽(のこ)す。子供が将来何者になるかは未知の事に属する。之を憂慮すれば子供をつくらぬに若(し)くはない」
「僕は若い時から一種の潔癖があって、人の前で酔払はない事、処女を犯さない事、素人の女に関係しない事。此の三箇条を規則にしてある…」

荷風之美 ②

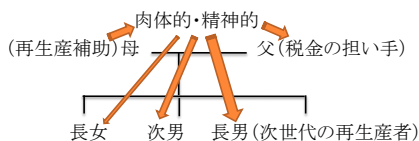
- ①、江戸時代にする憧憬
(= 現在からの逃避)
- ②、素人の拒絶
(= 結婚等の社会システムからの逃避)
- ③、子の拒絶
(= 生物的な営みからの逃避)
- ④、酔わない
(= 通俗的な逃避の拒絶)

子や家庭を築くという様な社会システムのな性的愛を拒否し
純粋な性的営みを追求

近代家族制度

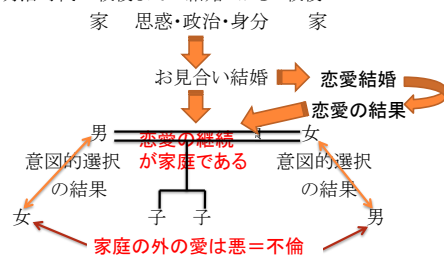
近代は、家族を基準に再生産と徴税をおこなうシステム

日本の場合、父を中心とした「家」制度を採用しているので、**家父長制度**と呼ぶ



純愛(ロマンチックラブ)と不純愛

明治時代～戦後までの結婚 から 戦後へ



『濯東綺譚』

永井荷風の小説。私娼窟・玉の井を舞台に、小説家・大江匡と娼婦・お雪との出会いと別れを、季節の移り変わりとともに美しくも哀れ深く描いている。荷風の日記『断腸亭日乗』には荷風の玉の井通いの様子が書かれており、主人公大江は作者の分身と考えられる。荷風の小説中、最高傑作ともされ、1960年・1992年に映画化された。

小説家・大江匡は小説『失踪』の腹案を練る。51歳で退職した英語教員が退職金を持って失踪し、カフー鞠めの女の元に身を寄せる。という筋書きで、主人公が身を隠す場所を向島あたりに設定し、6月末のある夕方、玉の井付近を散策する。急に大粒の雨が降り出し、大江が傘を広げると、浴衣姿の女が傘に入ってきた。大江は女(お雪)に誘われるまま、部屋に上がる。

大江はお雪のもとに度々通い、なじみを重ねる。お雪は大江のことを秘密出版に関わる男と誤解しているらしい。ある日、借金がなくなった「おかみさん」にしてほしいとお雪は言い出す。お雪を幸福な家庭の人にするのは自分ではない、と大江は考える。9月の末、お雪が入院したことを聞く。10月になると大江が玉の井通いをするのもなくなった。

谷崎潤一郎

1886年(明治19年)7月24日 - 1965年(昭和40年)7月30日)は、明治末期から第2次世界大戦後にかけて活動した小説家。耽美主義とされる作風で、『痴人の愛』『細雪』など多くの秀作を残し、文豪と称された。



谷崎潤一郎 第1期

高校卒業後東京帝国大学文科大学国文科に進むが後に学費未納により中退。在学中に和辻哲郎らと第2次『**新思潮**』を創刊し、処女作『誕生』(戯曲)や小説『刺青』(1909年)を発表。早くから永井荷風によって『**三田文学**』誌上で激賞され、谷崎は文壇において一躍新進作家としての地歩を固めた。以後『少年』、『秘密』などの諸作を書きつぎ、自然主義全盛時代において**物語の筋を重視した反自然主義的な作風**を貫いた。

芥川(=志賀直哉)対谷崎論争

1927年(昭和2年)2月に催された「新潮」座談会
『**文芸的な、余りに文芸的な**』

芥川・谷崎論争

1927年(昭和2年)2月『新潮』座談会の芥川の発言

谷崎の作品「日本に於けるクリップン事件」その他を批評「**話の筋というものが芸術的なものかどうか、非常に疑問だ**」、「**筋の面白さが作品そのものの芸術的価値を強めるといふことはない**」

『改造』誌上の「饅舌録」の第二回(3月号)の谷崎が反論「**筋の面白さを除外するのは、小説という形式がもつ特権を捨ててしまふことである**」と斬り返した。

芥川の『改造』4月号に「**文芸的な、余りに文芸的な——併せて谷崎潤一郎君に答ふ**」の題で谷崎への再反論

以後さらに連載は続き、谷崎の再々反論、芥川の再々々反論があったが、同年七月芥川の自殺によって幕切れとなった。

谷崎潤一郎 第2期

大正期には当時の**モダンな風俗**に影響を受けた諸作を発表した。この時期に**探偵小説の分野**に新境地を見出したり(江戸川乱歩にも影響を与えた)、映画に興味を示すなど、新しい試みに積極的な意欲を示した。

『秘密』『指紋』などの佳作

谷崎潤一郎 第3期

関東大震災後、谷崎は関西に移住し、これ以降ふたび旺盛な執筆をおこない、次々と佳品を生みだした。長編『**痴人の愛**』では妖婦ナオミに翻弄される男の悲喜劇を描いて大きな反響を呼ぶ。続けて『**卍**』、『**蓼喰ふ虫**』、『**春琴抄**』、『**武州公秘話**』などを発表し、**大正期以来のモダニズムと中世的な日本の伝統美を車の両輪**として文学活動을 続けてゆく。こうした美意識の達者としての谷崎の思想は『文章読本』、『**陰翳禮讃**』の2評論によって知られる。この間、**佐藤春夫との「細君譲渡事件」**、2度目の結婚・離婚を経て、1935年に3度目の夫人森田松子と結婚して私生活も充実する。

谷崎潤一郎 第4期

戦争中、谷崎は松子夫人とその妹たちとの生活を題材にした大作『細雪』に取り組み、軍部による発行差し止めに遭いつつも執筆を続け、戦後その全編を発表する(毎日出版文化賞、朝日文化賞)。

戦中は、「細雪」の原稿を持って、逃げ回る

避戦派

谷崎潤一郎 第5期

戦後は高血圧症が悪化、畢生の文業として取り組んだ『源氏物語』の現代語訳も中断を強いられた。しかし晩年の谷崎は迫りくる老いと闘いながら執筆活動を再開する。『過酸化マンガンの夢』(1955年)を皮切りに、『鍵』、『瘋癲老人日記』(毎日芸術大賞)といった傑作を執筆し、その文名は高まった。ノobel文学賞の候補とされただけでなく、1964年には日本人で初めて全米芸術院・米国文学芸術アカデミー名誉会員に選出された。

谷崎の女性観

1915年、石川千代子と結婚

1921年頃 千代子の妹せい子(『痴人の愛』のモデル)に惹かれ、千代子夫人とは不和

千代子 佐藤春夫「秋刀魚の歌」『この三つのもの』

谷崎『神と人との間』

1926年 二人は和解

1930年 千代子は谷崎と離婚し、佐藤と再婚した

1931年、谷崎は古川丁末子と結婚するが、1934年離婚。翌年、森田松子と結婚した。

谷崎の評価

日本の伝統的な私小説重視主義(私小説的リアリズム)

谷崎の創作的・物語重視の態度

① 思想性の欠如という誤解

情緒的で豊潤でありつつ高い論理性を誇るその文体

② 文体への評価(志賀直哉的観点からの批判)

強く魅力的な女性登場人物と、それに対するマゾヒスティックな主人公の思慕

③ 女性礼賛、マゾヒズム、フェティシズム

関東大震災以前の谷崎の作風は、モダンかつ大衆的であることが知られているが、谷崎自身はそのことを後悔していた

④ 震災前の大衆系作品への再評価

谷崎の短編評価

『刺青』(1910年) 耽美主義、マゾヒズム、江戸文明への憧れと近代化への拒絶

『髻間』(1911年)の自虐趣味

『お艶殺し』(1915年)の江戸趣味と残虐性

『神童』(1916年)の幼年期に対する憧憬と墮落の愉悅

『人魚の嘆き』(1917年)のロマンティズムや幻想趣味

『異端者の悲しみ』(同年)のエロティシズム

『母を恋ふる記』(1919年)の近親相姦的愛情と女性崇拜

『鮫人』(1920年)の伝奇趣味などをあげることができる。

関西移住後 短編→長編

『痴人の愛』(1924年)

豊かな風俗性と物語構造の堅牢さはじめて実を結んだ作であり、特に風俗描写の問題は大正期諸作の総まとめ

『卍』、『蓼喰ふ虫』(ともに1928年)

いわゆる夫人譲渡事件などに題材を取った双子の長編というべき作品であるが、現代風俗を扱いながら男女愛欲のさまを丁寧に描き、性愛の底知れぬ深遠を見せて、しかも、それが一皮めくれば文明や社会とつながっているという状況を描いた傑作。

谷崎の歴史物

『乱菊物語』（1930年）

『吉野葛』『盲目物語』『武州公秘話』（1931年）

耽美主義、マゾヒズム、残虐性、ロマン趣味、幻想趣味、
エロティシズム、女性崇拝

いわゆる谷崎エッセンスを継承

『蘆刈』（1932年）

『春琴抄』（1933年）

※1934年に『陰翳禮讃』、翌1935年に『文章読本』

戦中・戦後の谷崎

『細雪』は1942年ごろより筆を起し、『中央公論』に掲載されたが、1943年奢侈な場面が多いとして2回で掲載禁止となり、以降発表を断念。この年に私家版上巻のみを出版して、戦中何度かの断続を経ながら書き継いだ。1947年ごろには下巻の相当な部分まで完成し、翌1948年全編を出版。

『源氏物語』は、1939年から『潤一郎訳源氏物語』として発表されるが、中宮の密通に関わる部分は削除された。その後さらに手を入れて1951年に『潤一郎新訳源氏物語』、1964年に『潤一郎新々訳源氏物語』が刊行され、決定版となる。